



新たな気付きの起点となる「まち」、榴岡

宮城教育大学教職大学院特任教授
 仙台市立榴岡小学校元校長 猪股 亮文

皆さんは、「社会的孤立」という言葉を耳にされたことがあるでしょうか。京都大学の広井良典先生は、「社会的孤立」を「家族以外の者との交流やつながりがどのくらいあるかという点に関わるもので、自分の属するコミュニティないし集団の「ソト」の人との交流が少ない」状態と説明しています。また、福岡市福祉協議会は、「社会的孤立」により発生する問題として、「孤立死」「虐待」「自殺者の増加」「薬物依存」などを挙げています。こうした問題が日常の中で顕在化する現在の状況を目の当たりすると、社会的動物と言われる人間にとってコミュニティや人とのつながりが希薄化した生活の中で人生を送ることが、どれほど難しいものであるかを痛感させられます。

実際、日本において「社会的孤立」の状態にある方の割合は、どれほどなのでしょう。2005(H17)年にOECD(経済協力開発機構)が行った「社会的孤立」に関する調査によれば、日本では15.3%の人々が「社会的孤立」の状態にあり、その割合は調査を実施した先進国20か国の中で最も高いとのことでした。この調査結果の割合を仙台市の当時の人口(2005(H17)年)に当てはめてみると、仙台市では約156,825人が「社会的孤立」の状態にあったのではないかと推測されます。当時から17年後の現在、この数値がどのように推移したか、大変気掛かりなところです。

次に、2019(R1)年に仙台市健康福祉局が16歳以上の市民から無作為抽出した5,000人を対象に実施した「地域の福祉に関するアンケート調査」の「地域や人との関わりの程度」について紹介したいと思います(下図)。考察によると「震災を経た2014(H26)年の調査時に比べ、近所の付き合いが少なくなっています。他の設問への回答では近隣での支えあいの経験

も少なくなっていることも分かります。それでも、日ごろからの交流は大切である、「困ったとき」の助け合いが必要という回答も多くありました」とのことです。(下線は筆者による)回答者は自由さを楽しみたい一方、自由であるがゆえの「孤独さ」を感じ、人とのつながりが希薄化した現状をそのままではよいとは考えていないことも窺えました。この調査の回答者を安易に「社会的孤立」の状態にある人々と読みかえることはできませんが、仙台市には、「つながりが強すぎるのは生きにくい、とは言え、なさすぎるのも生きにくい」と考え、自分にとって塩梅のよいつながり先やつながりの形、つながり方を求めている方々が、地域には現に存在していると考えてよいのではないのでしょうか。

私は、「塩梅のよいつながり」を地域で実現するためには、地域にある複数のコミュニティがミルフィーユのように重なり合い、人々の流動性を高めることが必要と考えています。各コミュニティ間の流動性が高まれば、個人と個人が適度に混じり合い、異なる属性をもつ人々の間に「新たな出会いや交流」を生み、個人が自分にとって「塩梅のよいコミュニティ」とつながる可能性も高まるはず。地域には、その場所に居住している地縁で「つながり」が生起する伝統的なコミュニティや、目標を共有し実現を志向することで「つながり」が生起するミッション志向型のコミュニティも見られます。私がお世話になった榴岡では、現在も、そうしたコミュニティが、地域で暮らすたくさんの方々のコミュニケーションと交流の空間と時間を創出する一方、「よりよく子どもを育てることがよりよいまちをつくる」という思いを共有し、各コミュニティに属する方々が「子育て」について共に考えたり、心ひとつに協働して諸活動に取り組んだりなさっています。榴岡では、各コミュニティが重なり合い、個人と個人も混じり合い、新たな出会いや交流を楽しみ、個人と個人が塩梅よくつながる「子どもの『共育』コミュニティ」という重層的なコミュニティの実相を見て取ることができます。

今後も、本学の先生方と共に、私も、この重層的なコミュニティを丁寧に見取ることで、「社会的孤立」の解消など「よりよいまちづくり」の本質を探りたいと考えています。榴岡は常に新たな気付きの起点となる「まち」です。

